新教科群３）

国際コミュニケーション学

藤田高弘・斉藤真子
岡村　明・野田真里
（中部大学国際関係学部准教授）

【抄録】 合同授業とグループ別に加えて、それぞれのグループ間の合同授業による文化比較（言語表現　宗教文化など）の中から、異文化との共生に必要となるものや諸問題を考えるために、外国人留学生を招いて交流会を持ち、国際コミュニケーションのあり方を考える。そして科学的分析力・思考力や地球市民としての倫理観を身につける。

【キーワード】 学び合い　留学生　交流会　コミュニケーション　異文化理解　言語表現　宗教文化　異質性　同質性　地球市民

1. はじめに

「国際コミュニケーション学」では、世界の多様な文化（自国の文化を含め）や文化の背景にあるものの見方・考え方について理解し、疑似体験や学び合いを通し異文化との共生に必要な感性と寛容な心を高め、異文化間におきる諸問題に柔軟に対応し行動する力を育成することをねらいとしている。このねらいを達成するために、高校２年生を対象に１クラス40名を３つのグループ（日本・英米・韓国）に分け、それぞれのグループを３人の教員（国語・英語・美術）が担当して言語・生活・宗教についての授業を少人数で展開してきた。但し、３つのグループがそれぞれ単独で授業をするだけではなく、２グループ合同の授業を言語で２回、宗教で２回、３グループ合同授業を５回行い、教え合いの場面をつくり、他グループとの知識の共有を進めてきた。

平成19年度より「国際コミュニケーション学」はＳＬＰⅡの地球市民学の前期の講座として実施することになり、新たに科学的思考力の育成や地球市民としての倫理観を養わせることをめざすことになった。また、後期に行われるＳＬＰⅡの地球市民学「共生と平和の科学」やＡＳＰの地球市民学で必要な基本的知識や健全な国際感覚を身につけさせるプレ学習としての役割も持つこととなった。

今年度は、その手だてとして次の３点を重点目標とした。

１）科学的分析力・思考力や地球市民としての倫理観を身につけさせる授業内容を工夫する。

２）文化比較の場面では同質性と異質性のバランスを考えた授業内容に心掛ける。

３）３グループ合同授業で外部講師による直接体験や講義の導入を効果的に行う。

１）に関しては、授業の中で、統計を分析する場面を取り入れる等、科学的に思考してものごとを客観的に推測・判断する力を伸ばしていく。特に価値観のベースとなる宗教についての授業では、興味関心を高めさせる内容を工夫していくが、特定宗教の価値観の押しつけと受け取られないよう慎重に扱う。

２）に関しては、日本と他国の文化を比較する場合、異質性に着目するだけではなく同質性にも目を向けるような授業内容を考える。同質性に着目させ、共感できる価値観・考え方に触れさせていく方が、親近感を覚えさせ他文化を受入れやすくなると思われる。生徒の抱く感情（嫌悪感や好感）を考え、同質性と異質性をバランスよく扱うことに心掛ける。

３）に関しては、今年度は、夏休み後の３グループ合同授業として、外国人留学生を招いて自分たちが調べた課題を分かりやすく伝えるという実践的な授業を試みることにした。国際コミュニュケーションの授業で身についた知識や態度が、実際に外国人に接する場合に生かされるかどうかを試す機会とした。

2. 授業の実際

⑴「日本の宗教観」入門　（６月９日実施）

ねらい）　世界の人々の宗教観はさまざまである。しかし、宗教は人生の指針としてまた社会において価値観、規範、行動様式、言語、芸術、祭祀、ボランティア、コミュニティなどのあらゆる点で人間生活の基盤となっている。世界の人々とうまくつきあっていく（国際コミュニケーション）ためには、相手の宗教文化の理解とともに自分たちの宗教文化も理解することが必要であることに気づかせる。

①１世界の宗教観

・地球村100人のうち　仏教徒は何人？　キリスト教徒

は何人？　イスラム教徒は何人？　無宗教は何人？

②宗教の理解は国際コミュニケーションのカギ

・世界の常識　日本の非常識

③宗教と科学

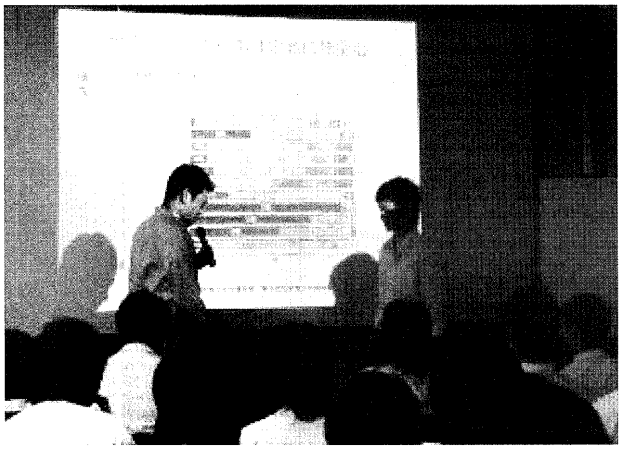
・アインシュタイン博士の言葉「宗教なき科学は不具であり、科学なき宗教は盲目である。」
　アインシュタイン博士の「宗教の３段階」

④ワーク　「まずはお祈りしてみましょう」

生徒の振り返りより

・「日本は世界の中で宗教を持つ人口が少ないことが分かった。ニュース等で、戦争・テロと言われても宗教戦争の意味も分からなかったが他国の宗教間の対立する気持ちがだんだん分かってきた。」

・「アインシュタインの言葉が心に残るとともに、世界各国の宗教事情と宗教観に相違があること分かって参考になった。宗教に少し興味がわいたのでこれからも調べていきたいと思う。」



「日本の宗教観」入門

⑵「韓国と英米の言語表現」（４月28日実施）

ねらい）　英語と日本語、韓国語と日本語を比較し、言語の特徴（発音・語順・敬語表現）についての基本的知識を理解し、言語に表れるものの考え方・コミュニケーションの仕方の違いに気づかせる。

①ハングル入門（発音・語順・敬語表現）

・プサンの商店街の看板を読みながら、ハングルの発音や日本語との類似点について理解させた。

・日本語と発音の似ている単語を取り上げ、韓国語に親近感を持たせた。

・身内を他人に紹介する際の敬語表現を取り上げ、絶対敬語（韓国語）と相対敬語（日本語）の違いについて理解させた。

②英語の特色、（語順・構造・敬語表現）

・日英の手紙の宛て名書きの違いから

・英語の構造が日本語とミラーイメージになること

・英語の敬語表現について

・英語と日本語を比較し語順や構造が違うことからくるコミュニケーションの仕方やものの考え方の違いについて

生徒の振り返りより

・「日本と韓国は敬語を使い年上の人を敬うことが似ている。年上の前で煙草を吸うことは良くないというのを映画でみたが韓国の方が日本より絶対敬語を使って上下関係をはっきりさせている。」

・「韓国語には日本語の発音とすごく似ている言葉がたくさんあり驚いた。語順や助詞のことも似ているし、学校では英語ばかり習ってきたから、知らなかったけど、日本人にとってわかりやすい言葉かもしれない。」

・「英語を話す人は、最初にどう思うかはっきり言うから、日本人がぼかしてあいまいに言うことでは伝わらないように思う。」

・「英語はストレートで日本語はあいまいな表現になるし、ＩとＹＯＵの関係をはっきりさせる。日本人は相手への気遣いからはっきり言わないことが良いと思っているが、相手に誤解される。」

　言語に表れる思考やコミュニケーションの仕方の違いについて気がついた生徒が多く見られた。また韓国語は難しいとか、英語は敬語表現がないといった思い込みを修正することができたと思う。さらに、授業の中で類似性を取り上げることで、他の国の言語や文化に対する関心を親近感を持ちながら高めさせることができた。

⑵夏休み課題「受け入れる・溶け込む」の合同発表会（９月15日実施）

ねらい）　夏休みの課題「受け入れる・溶け込む」で外国人と日本人が相互にいかに受け入れきたか、いかに溶け込もうとしたかのレポートを書き、それを元に外国人留学生の前で発表させ、実践的なコミュニケーション能力を身につける。

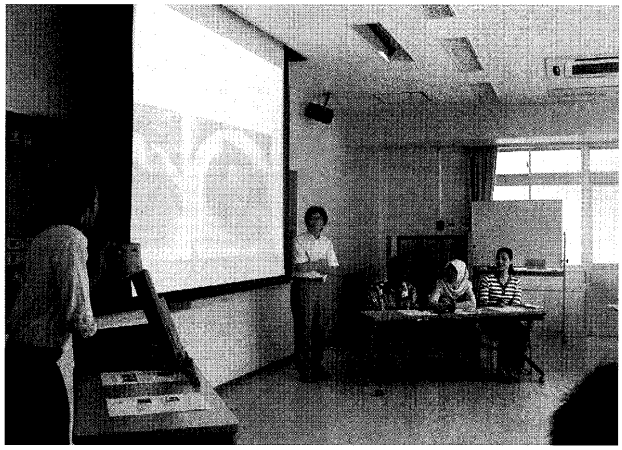
①クワークさん（カナダ）・ヒダヤさん（マレーシア）・チョンさん（韓国）の留学生に自己紹介を兼ねて各国の挨拶を自国の言葉で行ってもらい、国あてクイズをおこなった。

②各グループ（日本・英米・韓国）の代表者が３人の留学生に対して、自分の調べたレポートを発表させ、その内容がうまく伝わるか、理解してもらえるかを確かめた。

・日本グループの発表
　『外国人落語家　快楽亭ブラックについて』

・英米グループの発表
　『人間は母国語が大好き』

・韓国グループの発表
『話し方に表れる、日本と韓国の違い』



夏休み課題「受け入れる・溶け込む」の合同発表会

③留学生からコメント

「単に文化の違いを知るだけでなく、なぜその違いがでるのかを深く追求していくことが大切」

生徒の振り返りより

・「カナダからの留学生は来日３日目で英語しかしゃべれず、最初は何を言っているのか全く分からなかった。文化の違いを指摘したり確認したりするのには、まず言語の壁をこえなければならないと思った。身振り手振りにも限界があるし間違って伝わるかもしれない。」

・「留学生から質問されて上手く答えられなかったことから、自分は日本についてほとんど知らないんだなと思った。他国を知ると同時にやっぱり自分の国を知らないと恥ずかしいと思った。」

・「文化の違いは埋められないし、言語も違うので触れ合うのは難しいと思っていた。しかし、この授業で文化の違いは埋めるものではなく、受け入れるものだということ知った。」

留学生を招いての発表は、各グループで進めてきた学習を共有する場になり、他文化に溶け込んだり、受け入れたりする事例を通し、その難しさや心構えを感じさせることができた。また実際に外国人に説明する際、言語の壁を乗り越える難しさを痛感させられた授業であった。

2.　前期授業内容

「国際コミュニケーション学」　―地球市民としてのコミュニケーション力を磨く―

全体　野田先生	斉藤先生	岡村先生	藤田先生
４月14日（金） 全体説明15分 希望調査05分 １展開	オリエンテーション 斉藤グループの説明５分 日本文化とコミュニケーション	オリエンテーション 岡村グループの説明５分 韓国文化とコミュニケーション	オリエンテーション 藤田グループの説明５分 英米文化とコミュニケーション ＋全体説明５分
４月21日（金） １展開	異文化コミュニケーション合同ワークショップ ＊　異文化社会をサバイブする ＊　カルチャーショックを乗りこえる		
４月28日（金）	日本の生活様式１	韓国・英米の言語表現 （合同）	韓国・英米の言語表現 （合同）
５月12日（金）	日本・英米の言語表現 （合同）	韓国の生活様式１	日本・英米の言語表現 （合同）
５月26日（金）	日本・韓国の言語表現 （合同）		英米の生活様式１
６月２日（金） １展開	特別授業１　留学生との合同交流会・発表会ｏｒ討論 発信型異文化コミュニケーション体験学習		

6月9日（金）	特別授業2　日本の宗教観入門 日本の仏教、儒教、キリスト教とコミュニケーション		
6月16日（金） 1展開	日本の宗教1	韓国・英米の宗教 （合同）	韓国・英米の宗教 （合同）
6月30日（金） 1展開	日本・英米の宗教 （合同）	韓国の宗教1	日本・英米の宗教 （合同）
7月7日（金）	日本・韓国の宗教 （合同）	日本・韓国の宗教 （合同）	英米の宗教1
7月14日（金）	宗教の振り返り＋ 夏休み探求課題の説明	宗教の振り返り＋ 夏休み探求課題の説明	宗教の振り返り＋ 夏休み探求課題の説明
9月8日（金）	発信型異文化コミュニケーション合同学習の準備		
9月15日（金）	発信型異文化コミュニケーション合同発表会（留学生とともに） 「文化、宗教、価値観の異なる人々とのコミュニケーション力を磨く」		
9月29日（金）	振り返りと総括・アンケート		

4. アンケート結果

2006.9.29、授業最終日に新教科「国際コミュニケーション学」について、高2全員にアンケートを実施した。（　）内の数字は質問に対して、肯定的な意見を選択した生徒の割合である。

（　）は2003年度〔　〕は2004年度【　】は2005年度《　》は2006年度

1．一つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点から知識が得られると思う。
……（62%）〔77%〕【80%】《79%》

2．学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。
……（82%）〔88%〕【93%】《93%》

3. 様々な問題が入り組んだ現代の社会問題に関する知識が得られたと思う。
……（57%）〔74%〕【85%】《80%》

4．新教科で扱ったような「答えの出にくい問題」について学習することは大切だと思う。
……（81%）〔82%〕【90%】《95%》

5．新教科で学習した問題に対して自分の意見や考えを持つようにしている。
……（69%）〔73%〕【75%】《73%》

6．新教科で学習した知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つようにしている。
……（54%）〔62%〕【64%】《68%》

7．一つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考えることができると思う。
……（50%）〔73%〕【69%】《68%》

8．一つの課題を深く分析したり、幅広くまとめたりする機会になると思う。
……（67%）〔79%〕【70%】《75%》

9．新教科の授業を通して、自分の教養が深く広くなると思う。
……（77%）〔81%〕【83%】《79%》

10. 新教科の学習が、これからの自分の進路選択や自分の生き方の助けになると思う。
……（34%）〔36%〕【40%】《47%》

11. 新教科で学んだことを現実の生活や社会で役立てようと思う。
……（52%）〔55%〕【58%】《61%》

12. 新教科で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。
……（62%）〔64%〕【74%】《76%》

13. 新教科で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。
……（52%）〔65%〕【67%】《58%》

14. 新教科の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事項への関心が高くなると思う。
……（39%）〔65%〕【66%】《65%》

15. 新教科で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容も深く学ぶようになると思う。
……（25%）〔40%〕【35%】《36%》

16. 少人数で学習したため疑似体験など多様な活動がで

きると思う。

……（61%）〔73%〕【76%】《62%》

17. 新教科の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。

……（55%）〔61%〕【69%】《58%》

18. 3つのグループの中から選べることが意欲的に取り組むことにつながると思う。

……（52%）〔64%〕【63%】《61%》

19. 新教科で一つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科（例、英語、国語）を意欲的に取り組むことにつながると思う。

……（21%）〔29%〕【27%】《24%》

20. 新教科で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。

……（20%）〔20%〕【９%】《17%》

参考 そう思わない【68%】《59%》

21. 新教科は週１回では足りないので増やして欲しい。

……（12%）〔17%〕【13%】《18%》

参考 そう思わない【54%】《54%》

22. 新教科を週１時間学ぶより他教科の学習がしたい。

……（24%）〔26%〕【12%】《16%》

参考 そう思わない【60%】《56%》

23. 総合人間科より新教科のほうが、学習の目的がはっきりしていると思う。

……（19%）〔35%〕【43%】《33%》

24. 総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。

……（63%）〔36%〕【38%】《55%》

25. 新教科は総合人間科以外の他教科より、友人や教員などの「人と学びあう」機会が多いと思う。

……（57%）〔71%〕【61%】《53%》

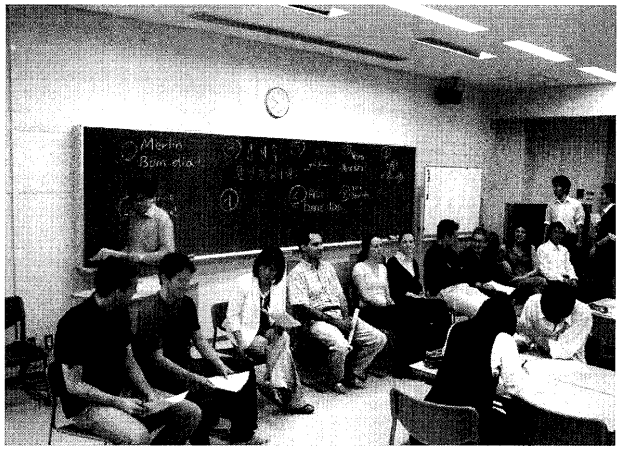
5. 成果

①「留学生との交流会」における相互の学び合いの深まり

事後アンケートの自由記述で、「学習活動で印象的だったもの」として、半数ほどの生徒が取り上げているのが「留学生との交流会」（６月２日）である。

生徒の振り返りから

・「私は外国人から見た『ヘン』な日本文化の授業がとても印象に残っています。私たちのグループには全く日本語が話せないアルバニアの方が参加していださったのですが、宗教はおろか日本人の性質のようなことを質問された時にも、ボキャブラリーが全く足りずに四苦八苦しました。自分が意識していないことについて聞かれた時には戸惑いましたが、わかりやすく伝えるために自分（日本人）について客観的にとらえることができておもしろかったです。」



留学生との交流会

②リポートを「人」を中心にすえることで「伝えやすさ」がうまれたこと

事後アンケートの自由記述で、「学習活動で印象的だったもの」として、25%ほどの生徒が取り上げているのが「夏休みの課題（レポート）発表」と留学生を招いての合同発表会である。「人」を中心にすえてテーマを取り上げることで発表内容に具体性がうまれ、聞く人に分かりやすいものになった。これは同じグループの他の人の発表を興味深く聞くことにつながり、他のグループの発表にも興味・関心が持てることにつながったからである。

生徒の振り返りから

・「夏休みの課題の発表を全体で行った時が一番印象に残りました。私は代表ではなく、話を聞いてメモをとるだけでしたが、三つの国の方の意見が結構違っていて興味深かったです。「英語が出来ないと話にならない」と発表された意見に対して「どの言語も大切」とおっしゃっていたカナダ人の方の言葉は認識を新たにされたような気がしてとても心に残りました。一方、やっぱり外国の方は日本の“無常感”についての理解はあんまり持っていないのだなあとも思いました。」

・「留学生の方が３人来てくれた発表会の授業が一番印象に残っています。今までいろいろなことを学んで来ましたが、それをもとに発表し実際に意見を聞くことが出来たので、より知識が深まったように感じます。自分の予想とは違う意見も聞くことができ、いろいろな考えがあるのだと改めて実感しました。」

6. 今後の課題

①与えられたデータの「読み取り・分析・推論」と的確なデータ分析に基づくプレゼンテーション能力を育成する機会を授業の中で取り入れること。

国際コミュニケーションの授業では、各国間に横たわる文化摩擦の度合いや国民感情など慎重に扱うべきデータが多くあり、生徒のデータ活用能力（信憑性を判断する力等）を高めていくことがより重要になってくる。そのためには、まず様々なデータを生徒に触れさせる場面を授業の中に取り入れていくことが必要になってくる。例えば、授業の導入部の学習課題をつかませる段階で、統計的なデータを提示し、読み取りをさせどんな問題点があるかを把握させたり、データ収集や活用を促進させるために生徒発表の機会を増やしたりすることが考えられる。より一層授業を精選しデータ活用能力を高めさせていきたい。

②学びの杜学術コース「地球市民探究講座」との連携をより密にし、高度な内容の授業にも対応できるように基礎の定着を図ること。

本年度より、ＡＳＰとして学びの杜の学術コースに「地球市民探究講座」が作られ、ＳＬＰⅡの地球市民探究学の国際コミュニケーション学を終えた高校２年生が参加する機会を設けた。ＡＳＰでは大学教員によるより専門的・先進的な内容が用意されている。しかし、その授業内容が高校生にとって高度で理解できないことが多ければ関心意欲の低下を招くことが心配される。本年度は高校・大学それぞれの授業内容を模索している段階である。お互い授業内容・授業方法を検討しあう機会を増やし、地球市民学の基礎とは何か、効果的な授業方法はどうすべきかを探ることが急務である。

（文責　岡村　斉藤）